たまねぎ　べと病発病株は圃場外に持ち出しましょう

令和４(2022)年４月 13 日
芳賀農業振興事務所

1　べと病の発生サイクル

管内たまねぎ圃場でべと病の発生が散見されます。<u>今作のべと病発病株（下図内⑤）を圃場に残すと土中に菌の胞子がのこり、次作で定植した苗に感染</u>し、２～３月ごろに再度発病します。これを繰り返すとべと病が蔓延するリスクが高まります。

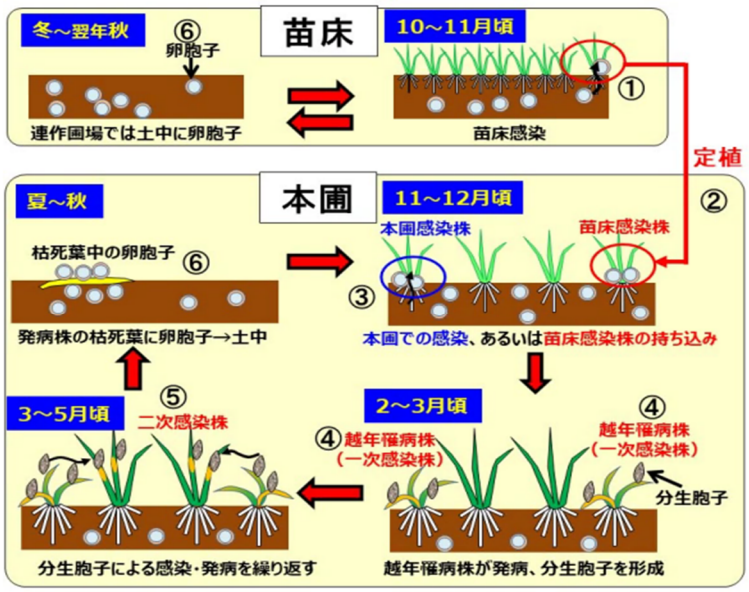


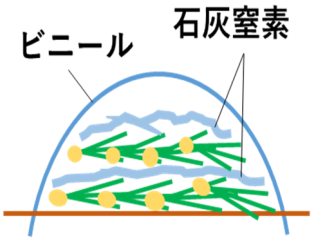
図１　タマネギべと病の発生サイクルの模式図（佐賀農業セ）※佐賀県タマネギべと病防除対策マニュアルより

↑べと病（一次感染株）
健全苗に比べ葉色が淡く、よじれる。灰白色のカビが生え、周囲に飛散する。

！重要！
①　べと病発病株がみられたら、適宜抜き取り、圃場内に残さないこと
②　圃場を片付ける際に、べと病発病株を圃場にすきこまないこと

2　発病株の処分

抜き取った発病株は、べと病の胞子が飛散しないように密閉した状態で太陽熱を加えて十分に腐らせる。少量なら、肥料袋などに入れて口をしばり、直射日光に長期間さらす。多量なら、発病株１ｔ当たり、石灰窒素 10kg を混ぜてビニールシートで覆い腐らせる（たまねぎを作付けしない空き地で行う）。



3　本圃の土壌消毒

べと病等の<u>病害が多発生した圃場は、連作を避けることが望ましい</u>が、連作をする場合は、太陽熱消毒、湛水処理や農薬による土壌消毒を行う。

【太陽熱消毒】
圃場にビニール等をべた張りし、裾を土で覆い、夏季高温期に２１日以上おく。

【湛水処理（水田の場合）】
圃場を湛水し十分に代かきを行う。水深を 5cm 程度に保ち、夏季高温期に５０日以上おく。その後落水し、弾丸暗渠や額縁排水等の排水対策を整備する。

【農薬による土壌消毒】
ガスタード微粒剤／バスアミド微粒剤（べと病、紅色根腐病、黒腐菌核病など）